様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １３ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１８２２２

研究課題名（和文）大江スミのイギリス留学による明治期の住居衛生論の導入と国内での展開に関する研究

研究課題名（英文）The Introduction and Evolvement of Housing Hygiene Theory to Japan in Meiji Era by Mrs. Sumi OE through studying abroad in England

研究代表者
須崎　文代（SUZAKI, FUMIYO）

神奈川大学・工学部・助教

研究者番号：２０７３５０７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、住宅近代化の基礎となった住居衛生論の導入と展開について、大江スミ（旧姓・宮川寿美子1875-1948）がイギリス留学で得た見識と帰国後国内で展開した内容やその傾向について明らかにしたものである。工業化先進国のイギリスでは衛生改良の取り組みが進んでおり、スミは家政学を学んだ上でさらに衛生学を専門的に修めた。帰国後、スミは国内の家政学や生活改善を牽引するリーダーとして日本の実情に即した教育を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、大江スミがイギリス留学で修得した住居衛生論について明らかにするため、イギリス国内のアーカイブにおいて、当時の衛生論と留学先のカリキュラムについての文献調査を実施し、住宅遺構の視察を含めて検討を行った。国内の動向については、大日本私立婦人衛生会機関誌の分析から言論の傾向を明らかにし、スミが展開した住居衛生論は、イギリス衛生の情報を含みつつ、日本の実情に合わせたものであったことを明らかにした。
住宅の近代化は、伝染病対策を契機に衛生の改良を主要課題としており、日本でも同様の背景から住居衛生の改良が急務となったのである。本研究の成果は、こうした歴史についての重要な知見となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research clarify the introduction and evolvement of the housing hygiene theory that became the basis of housing modernization, focusing on Sumi OE's (old name: Sumiko Miyagawa 1875-1948) insights gained by studying in England, and the contents and trends that she influenced in Japan after returning.
In England, a advanced industrialized country, the actions for improving hygiene had developed at that time. Sumi learned home economics and then specialized in hygiene furthermore. After returning to Japan, she provided education adjusting to Japanese actual situation, as a leader in domestic science and life improvement.

研究分野：近代住宅史

キーワード：住居衛生　伝染病　イギリス　近代日本住宅史　家政　大日本私立婦人衛生会　Bedford College　Battersea Polytechnic

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

建築や都市の近代化は衛生の改良を主要課題のひとつとしていた。日本でも伝染病対策を契機に、住居衛生の改良が急務となったのである。衛生論が住居の計画に導入されたことにより、間取りや便所・風呂・上下水・換気装置といった住宅設備等の様々な部分にも影響を及ぼした。須崎（研究代表者）が明らかにした台所の近代化に関する研究においても、衛生論は変化の根本に関わる主題として見出された。

日本国内での近代衛生論の展開は主に幕末以降に見られ、明治初期から中期にかけては、主にイギリスやドイツの衛生先進国を参考にするかたちで、医学分野を中心に導入が試みられていた。開国とともに都市部を中心として蔓延したコレラ・チフスなどの急性伝染病や、国民病とも称された慢性伝染病である結核を予防するための対策として、衛生環境の改善が都市レベルで実践されもした。伝染病の流行は、特に都市スラムや低所得者層、あるいは多くの人が生活を共にする工場労働者で見られたことから、慈善団体などによって貧民救済の手段としても取り組まれていた。

とりわけ、明治中期から明治後期には、1905（明治 38）年発行の三宅秀著『家事衛生』や 1908（明治 41）年発行の石原喜久太郎著『新編家庭衛生』の発刊に見られるように、家庭内の衛生管理や住居衛生へと注目されることとなる。例えば、天野誠斎著『家庭宝典 台所改良』(1907（明治 40）年）では、医学博士北里柴三郎邸の台所が紹介された。そこでは、家庭内での伝染病対策として、ペストの媒介と考えられていた鼠害を防ぐため、排水溝や通気口、土台と床下の間に金網を張る、食品保存のための氷箱を設けるといった衛生面の具体的な取り組みが示されている。この時期に活発化した住居衛生の議論は、その後の住居論の基礎となったと言える。さらに、大正期以降には、建築学分野で具体的な住宅設備や建築計画といった解決方法の模索として展開されることとなった。

以上のような明治期日本の住居衛生論については、すでにいくつかの報告がある（主要な既往研究は下記の通り）。しかしながら、いつ誰がどのように導入・展開したものであったかという具体的な動向については明らかにされておらず、取り組むべき重要な課題として残されていた。

［明治期の住居衛生論に関する主要既往研究］

・安野彰ほか「衛生思想の展開ならびに設備技術等の関係から見た明治・大正初期における上流の邸宅」（平成 23～25 年度科学研究費補助金、須崎は研究協力者）

・宮崎信行・青木正夫らの明治期・大正期の住宅平面計画等に関する一連の研究「明治 10 年代の我が国住宅の衛生面を改良する計画論上の試み:衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その 1」日本建築学会計画系論文集 59(458),1994

２．研究の目的

そこで本研究は、明治期から大正期に形成された住居衛生論について、家政学修得を目的とした国費留学生である大江スミ（旧姓・宮川寿美子 1875-1948）による衛生学修得に着目し、イギリスからの導入と国内での展開を中心としてその動向を明らかにすることを目的とする。スミは、帰国後には東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の教授を務め、戦前期の家政学分野をリードした人物である。

1902（明治 35）年から 1905（明治 38）年にかけて、スミは家政学修得のためイギリスのバタシー・ポリテクニック Battersea Polytechnic へ国費留学し、掃除・洗濯・料理・磨きもの・衛生・育児・救急法・家事の伝授法を学んだ。その上で、さらに私費で留学期間を１年延長し、ロンドン大学のベッドフォード・カレッジ Bedford College の衛生科に進んで、衛生学を専門的に学んだ。

大江スミに関する研究は下記の通りこれまでにも行われてきたが、留学当時に修得した衛生学の見識について具体的に踏み込んだ研究は見られず、今後明らかにされるべき重要な課題として注目された。工業化先進国であった当時のイギリスでは衛生改良の取り組みが進んでおり、その先端知識をわが国へ持ち帰ったものと考えられる。また当時、住宅改良に関する議論は、家政分野を中心に展開されていたことから、スミの国内における影響力を考えれば、帰国後に展開した住居衛生論は日本の住宅の近代化を大きく方向づけたものと考えられる。

そこで、本研究では、イギリス留学中に修得した住居衛生論の具体的な内容と教科書であったと考えられる衛生専門書の文献調査、および、帰国後国内で展開した著作の分析を通して、明治期日本に導入された住居衛生論の動向を明らかにするものである。

［大江スミに関する主要既往研究］

・拙稿「解題：大江スミの家政論の展開と住居観」『住宅建築文献集成 第 10 巻 大江スミ「応用家事精義」』柏書房 2010

・小林陽子「井上秀によるアメリカ家政学の受容:イギリス留学生大江スミとの違いを中心に」生活學論叢 16 号 2010

・大橋竜太「大江スミ留学当時の英国事情－公衆衛生および住宅・都市問題を中心として－」『東京家政学院生活文化博物館年報(14)』2004

３．研究の方法

研究方法としては､イギリスでの調査と日本国内での調査･分析の二つに大別される｡前者は、大江スミがイギリス留学で修得した住居衛生論について明らかにするため、大英図書館 The

British Library、サリー大学University of Surry（Battersea Polytechnicの後継機関）、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校Royal Holloway-University of London（Bedford Collegeの後継機関）の各アーカイブにて、当時の衛生論の動向と留学先のカリキュラムについて文献調査を実施した。留学中の経緯や視察先については『外国留学生報告書並二関係書類明治三十三年～大正五年』（お茶の水女子大学図書館所蔵）に記録が残されており、基本情報の把握はこの史料に基づいた。また、大英図書館における同国で刊行された衛生専門書に関する文献調査と、前記の留学生報告書からスミが訪問したと推定される都市（イギリス国内およびフランス、ドイツ中心）に現存する主要な建築遺構の視察によって当時の住居衛生の概要を整理した。

後者は、主に文献調査を中心に実施した。特に、日本国内の明治・大正期における衛生論の動向については、専門家らの代表的著作のほか大日本私立衛生会（明治16年設立）の機関誌を基本史料とした。とくに、当会の女性向けの組織として設立された大日本婦人衛生会の機関誌『婦人衛生会雑誌』（明治21～大正15年、全382号）は家庭衛生に関する議論が多く扱われていることから、これを基本史料として分析を行った。帰国後に展開した住居衛生論については、スミ自身の論稿について分析を行い、イギリスで修得した内容と日本国内で展開した論を相対的に検証した。

４．研究成果

本研究で得られた主な成果は、下記の４つに大別される。以下は各項目について得られた知見の概要である。

(1) 留学先バタシー・ポリテクニックでの修得内容と衛生学への志向について

まず本研究では、大江スミが初めに留学したバタシー・ポリテクニックでの修得内容について、特に住居衛生論に着目して文献調査を行った（図1）。

基本史料は、同校の大学十年史“The Battersea Polytechnic-A Record of Ten Years 1894-1904”（非売品）およびサリー大学アーカイブ所蔵の資料である。同書の記述内容によれば、家政学にあたる専攻は“Domestic Economy and Women’s classes”で、上記の留学生報告書の記録と照合すれば、スミはここに所属していたことが確認できる。既往研究（柴沼2004他）でも指摘されている通り、本書では日本人留学生が在籍していたことを記す記録が確認できた（p.66）。

図１ A Practical Household Class（“The Battersea Polytechnic-A Record of Ten Years 1894-1904” 非売品）

アーカイブにおける文献調査の結果、この専攻のカリキュラムは、調理、裁縫、洗濯など家事の技能習得と共に、衛生に関する講義がなされていたことが判明した。スミの報告によれば、衛生については「衛生ヲミスウエブニツキテ研修ス」（「従明治三十六年一月至明治三十六年十月 申報書」）と記されており、「ミスウエブ」が指す人物と考えられるMiss M.I.Webbが同専攻の教員として所属していたことが確認できた。Miss Webbは“Natural Science”先行で衛生学の教育も受け持っていたことが判明し、同氏の経歴は不明なものの、一定程度、衛生に関して専門的な立場であったと推察された。そのため、スミがバタシー・ポリテクニックでの家政学修得の後、ベッドフォード・カレッジで衛生学を専門的に学ぶことを決意した背景には、Miss Webbの指導が大きく影響した可能性が考えられた。

また、同校には他の専攻として建築・土木関連の“(i)Mechanical Engineering and Building trades”が存在することが分かり、教員の一人であるF.R.Taylor氏については、担当授業について“Brickwork, Building Construction, and Sanitary Science”と記されており、別の専攻ではあるものの建築の衛生が教育されていた事実に注目された。同氏の経歴も不明であるが、所属組織に“Mem Architectural Assoc.; Mem. San. Inst.; Honours in Practical Geometry, Brickwork and Masonry, and Building Construction.”と衛生協会に所属していたことが判明し、衛生の専門的知識を有した人物であったと考えられた。

このように本研究では、バタシー・ポリテクニック在学中に、スミが衛生を志向する契機となったカリキュラムの存在や人的関係が推察されることが明らかとなった。

(2) ベッドフォード・カレッジにおける衛生学の修得について

スミは、バタシー・ポリテクニック留学の後、私費でベッドフォード・カレッジに進み、衛生学を専門的に学んだ。同校のカリキュラムについては、Margaret J. Tuke著“A History of Bedford College for Women 1849-1937”（O.U.P. 1937）とロンドン大学アーカイブ所蔵資料を基本史料とした。同書によれば、“Hygiene Course”は1895年に創設され、衛生学、細菌学、化学、物理学、生理学の講義を含む２年制のコースであった。また、アーカイブ資料の文献調査では、スミの在籍や公衆衛生検査員試験を合格した記録も残されていることが明らかとなった。

また、同校での履修内容については、基本史料の留学生報告書のなかで下記のように報告されていることが分かり、この記録に基づいて文献調査を行った。

「従明治三十六年一月至明治三十九年七月　申報書
修業所教師
明治三十八年十月ヨリ引續キ倫敦ナルベッドフォルト女子大学 Bedford College ニ寄宿シ公衆衛生及衛生法令ヲ Dr.Wilcox ニ化学ヲ Mr.Leach ニ生理ヲ Dr.Etkrin(s?)ニ物理ヲ Mr.Walmax ニ就キ研修ス
明治三十九年五月中公衆衛生検査員ノ試験ニ及第シ其免許状ヲ受ク同七月中ベッドフォルトコレージニ於テ衛生科修業試験ニ及第ス」

当アーカイブの資料には、衛生学コースの所属長リストとして「1895-6 LOUIS PARKES／1896-9 THOMAS M. LEGGE／1899-1902 WALTER C.C.PAKES／1902-7 WILLIAM HENRY WILLCOX」という担当の履歴が確認でき、スミの報告とも合致することが確認された。同時期のイギリスの衛生関連書籍を調べると、コースの担当教員や所属長の著作が多数見出され、教員はある程度知名度のある専門家であったと推察された。

当時の衛生専門書は大江が参考書として学習したものが含まれるが、こうした書籍のなかには大江の著書の挿図と酷似した図版の掲載や記述内容などが認められ（図 2)、あらためて、著作でもイギリス衛生論を積極的に参考としたことが確認できる事実として注目された。

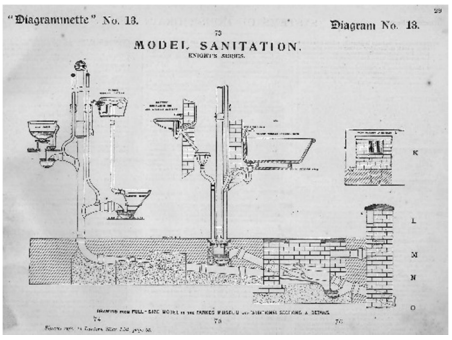

図 2 W.H.KNIGHT “Diagrammettes” 6th ed. London, 1921

(3) 国内明治期における住居衛生論の主題と議論の傾向について

明治初期から中期に住居衛生の改良論を展開したのは、「衛生」の名づけ親である長与専斎や、衛生行政を担った後藤新平のような医学に立脚する社会改良家、あるいは家政学分野を主導した女史たちであった。建築分野では、森林太郎「造家衛生の要旨」(『建築雑誌』1894（明治 27）年）など住居衛生に関する論稿が若干見られるものの、本格化したのは明治末期以降である。

そこで本研究では、上記『婦人衛生会雑誌』における議論に着目し、明治期に形成された日本の住居衛生論について傾向の分析を行った。具体的には、本誌中で住居に関する記述が認められた論文・記事全 301 件を対象とし、課題や考え方の傾向について分析を行った。その結果、得られた知見の概要は以下①、②の通りである。

① 『婦人衛生会雑誌』の言説にみる住居衛生論の主題

住環境や住居の衛生に関して扱われた内容は、近世の養生論に基づく土地の湿気論や西洋の衛生思想に影響を受けた改良論など、さまざまな対象に及んでいた。特に、近代化以前の日本の住居では、療養、看護、出産、養老なども個別の住居内で行われていたため、これらを含む様々な箇所が改良の対象となった。

同誌中(明治 20 年代から大正末まで)の住居衛生に関する課題や方策について概観した結果、具体的な対象としては、(a)採光、(b)換気・通風、(c)室温・暖房、(d)清掃・消毒、(e)疾病対策が抽出され、これらが明治・大正期の住居衛生論の中心となっていたことが読み取れた。(a)採光は主に日光の消毒作用や子供の成育における必要性、湿気の除去に関連して述べられ、(b)換気・通風は明治・大正期を通して約半数の事例で継続的に確認できた。例えば「空気の流通が悪いと住人は不健康になるので、時々戸や障子を開いて新しい空気を流通するべきである。空気の流通不良のために生じる病は肺病、瘰癧、神経病などがある。以下略」(「掃除の仕方」第 177 号 1904（明治 37）年）というように、疾病対策（特に大正期は肺結核）と合わせた記述や、暖房使用時の換気の必要性についての記述が多く見られた。(c)室温・暖房については、気密性が低く冬は寒さが厳しい日本住宅の特性を批判的に捉えつつ、暖房設備を用いる場合は換気が必要だが、日本の障子や板戸は通気性があるという日本独自の考察を含めて説かれていた。(d)清掃・消毒は明治末から大正初期にかけてやや扱いの程度が低下するものの、やや高い割合で継続的に取り上げられ、黴菌の除去や清潔を保つ考え方の普及が図られていたことが分かる。(e)疾病対策で対象となる病は様々であるが、室内外の環境の整備のほかペストの媒介となる鼠・蠅・蚤の対策が含まれ、特に 1909（明治 42）年頃には排水口や食品に網をかけて防鼠防虫に講ずる措置が散見された。

② 『婦人衛生会雑誌』の言説にみる住居衛生論の対象空間・設備

続いて、同誌の記述内容から、衛生改良の対象となった空間・設備を取り上げ、記述の傾向を分析した。

空間としては、台所、便所、風呂、病室、産室、寝室、子供室が中心であった。病室、産室が一定程度含まれるのは、前記の通り近代化以前は一般的に住宅内で療養、出産が行われていたことによる。また、日本特有の設備としては、畳と便所に関する記述が注目された。

まず対象空間として最も多いのは「台所」である。コレラやペストなどの病原菌対策をはじめ、食物を扱う空間であるために、殊のほか清潔さが重視された。特に明治 30 年代後半から扱いの頻度が高まり、採光、防鼠・防虫、排水、排気など具体的対策についての記述の増加が認められる。次に多く言及されたのは「病室」と「便所」である。「病室」については、創刊年からほぼ

継続的に一定程度の扱いがみられ、結核など肺病患者への換気・採光の必要性、看病における消毒の方法や適切な部屋の位置・広さなど、室内環境を清潔に保つ考え方が論じられていた。「便所」は明治 20 年代から 30 年代にかけて扱いの頻度が高く、清掃方法や「下水」の整備の必要性などを中心に論じられていた。「子供室」、「寝室」、「産室」も基本的には、採光、換気、採暖等が中心で、就寝中の暖房利用における換気の必要性や、部屋の特性に合わせ快適性を保ち得る部屋の位置についての記述が見られた。また、日本住宅特有の傾向として「畳」の不潔さを指摘した記事が一定程度継続的に確認されたことに着目された。特に明治末期以降に記述の程度が増し、畳が不衛生になりやすいという批判をはじめ、畳が含む湿気の除去や蚤の発生の予防方法について論じられていた。

(4) 大江スミの展開した住居衛生論について

大江スミは家政学を牽引する立場から、多くの論稿を残している。これらのうち、本研究では、スミ自身が展開した住居衛生論の特徴についても分析を行った。とりわけ、1916（大正 5）年に刊行された『應用家事講義　第一巻 緒論・住居』（宝文館）は、当時刊行された住居論関連の著作のなかでは大書のひとつといえ、スミの理論が忠実に表された主要文献として注目した。すなわち、スミは同書において、冒頭に「家政の四大要件」として「衛生・経済・教育・作法」の重要性を挙げ、そこで第一に衛生を示していることからも、家政や住居を考えるうえで最も重要なもののひとつと捉えていたことが分かる。

また同書中、「第二編 住居」は、基本的に日本の在来住居を対象とした住居論となっている。そのため、同書の論は、イギリスの衛生設備に関する紹介を含みつつ、日本特有の問題に注目して展開されている。住居の構法はもとより、宅地選定、給排水、採光・換気のための開口部（板戸・障子など）、床・壁の設え（畳に象徴される独自の材料）、暖房設備、掃除・修繕、台所・風呂・便所（図 3）など水まわり空間の計画や具体的な設備の説明に及び、いずれも日本の実情にもとづいた改善策が検討されている。

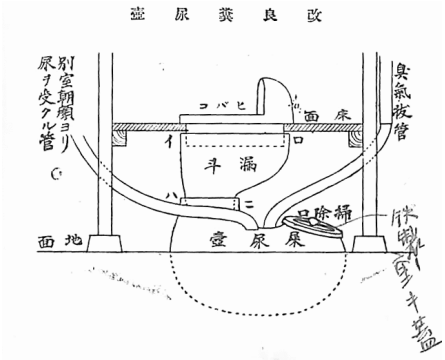

図 3 「改良糞尿壺」（大江スミ著『應用家事講義』p. 302 所収）

当時、住居衛生について本書ほど具体的かつ詳細な内容に踏み込んだものは管見の限り存在せず、家政学、建築学あるいは生活改善運動へ相当の影響力があったものと推察された。

以上の研究成果は、明治期以降に掲載された住居衛生論の導入背景と国内での展開の一側面を示すものである。本研究では、理論的な展開に着目して調査分析を進めたが、今後はこうした住居衛生の考え方の家庭生活における受容の動向という観点からも明らかにされることが期待される。

※なお、以上の研究成果は日本建築学会、日本生活学会、日本生活文化史学会等の大会においてすでに研究発表を行っている（詳細は次節「５．主な発表論文等」参照のこと）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 須崎文代
２．発表標題 『婦人衛生会雑誌』（明治 21 年～大正 15 年刊行）にみる明治・大正期の住居衛生論の主題と傾向について
３．学会等名 日本建築学会2020年度大会（関東）（千葉大学）
４．発表年 2020年

１．発表者名 須崎文代
２．発表標題 明治・大正期の衛生論における畳の批判 －『婦人衛生会雑誌』（明治21年～同26年）、『婦人衛生雑誌』（明治26年～大正15年）の記述を中心として－
３．学会等名 日本生活文化史学会2019年度大会・総会（神奈川大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷川政平、須崎文代、内田青蔵、安野彰
２．発表標題 『婦人衛生雑誌』（1888～1926年刊行）にみるガラス建具に関する議論の動向－戦前期日本の住宅におけるガラス建具の普及過程について－
３．学会等名 2019年度日本生活学会研究発表大会（跡見学園女子大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷川政平、須崎文代、内田青蔵、安野彰
２．発表標題 明治期から大正中期の住宅図面にみるガラス建具使用の動向 －戦前期日本の住宅におけるガラス建具の普及過程について（２）－
３．学会等名 日本建築学会2019年度大会（北陸）（金沢工業大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 須崎文代
２．発表標題 日本的厠所革命－近代における便所の革新と日本の住まい
３．学会等名 東方学研究国際フォーラム（広東外語外貿大学・中国）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 須崎文代
２．発表標題 宮川寿美子（大江スミ）がイギリス留学で修得した住居衛生論について（２） ―バタシー・ポリテクニックにおける衛生、住居関連科目に着目して―
３．学会等名 2018年度日本生活学会研究発表大会（慶応義塾大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 須崎文代
２．発表標題 明治期日本におけるイギリス住居衛生論の導入と展開について－大江（宮川）スミのイギリス留学を通して－
３．学会等名 日本常民文化研究所第117回研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 須崎文代
２．発表標題 宮川寿美子（大江スミ）がイギリス留学で修得した住居衛生論について ―ベッドフォード・カレッジにおける衛生学と衛生関連書籍に着目して―
３．学会等名 2017年度日本生活学会研究発表大会（亜細亜大学）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

１）拙稿「特集１ 住まいの水まわりの空間の変革　―明治・大正期における上下水の衛生工事に着目して―」『土木技術』（理工図書，2019年12月）では、本研究の成果を含むアウトリーチとして公開したものである。 ２）上記の、中国・広州における東方学研究国際フォーラム（広東外語外貿大学）での招待講演「日本的厠所革命－近代における便所の革新と日本の住まい」では、本研究で得られた見識をもとに、便所をふくむ人間生活の衛生空間に関する研究の意義や射程について発表を行った。日中の参加者から強い関心が寄せられたことを付記する。 ３）２）の国際フォーラムをふまえ、「東方学研究国際フォーラム『厠所(便所)革命』に参加して:共同研究「便所の歴史・民俗に関する総合的研究」に向けて」『民具マンスリー』（52巻3号 2019年6月）へ、上記の調査研究の意義について寄稿した。 ４）本研究の問題意識に関連して、代表者が所属する日本常民文化研究所では2019年度より共同研究「便所の歴史・民俗に関する総合的研究」（研究代表者・須崎文代）が創設され、人々の生活や住まいの環境における衛生について、学際的な研究が展開されることとなり、本研究の成果はより幅広い研究活動へと継承された。さらに2020年度からは同研究所の中心的課題として基幹研究に位置づけられ、継続的な研究活動が推進される計画となった。 ５）拙稿「住むための衛生の軌跡」（LIXILウェブサイト「社会と住まいを考える（国内）特集記事2020年7月）」では、新型コロナウィルスのパンデミックという世界的危機をふまえて、住居衛生についてどのような取り組みがなされてきたのか本研究による知見をふまえた論考をアウトリーチの一環として寄稿した。 (https://www.biz-lixil.com/column/urban_development/sh_review001/) ６）拙稿「ドメスティック・ディスタンス――人間のふるまい(ヒューマン・ビヘイヴィア)と衛生の尺度」（仮題・日本建築学会 建築討論WEB 特集「距離のポリティクス - 感染症と建築学の交点」2020年8月1日公開予定）でも、５）と同様に住居衛生論の歴史的観点から、本研究による知見にもとづくアウトリーチの一環として寄稿した。（https://medium.com/kenchikutouron）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考